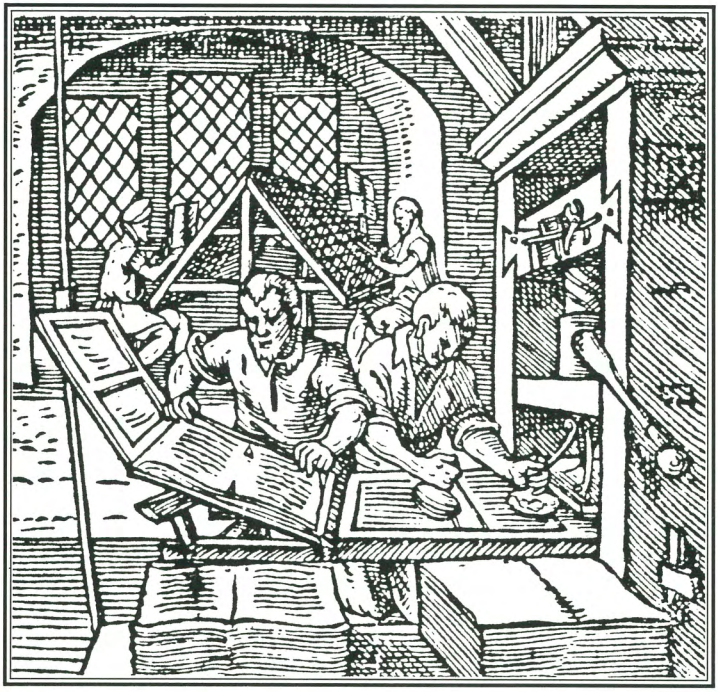
大学出版

'93 秋

No. 19



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
19号

Fall・1993

読書の周辺　音楽雑考 ―― 笠原　潔　1
読書の周辺　酒づくりのはなし ―水と米― ―― 竹田　正久　5
『総合図書目録』『30年の歩み』の刊行を終えて ―― 寺山　浩司　9
大学出版部協会三〇年の軌跡 ―― 関野　利之　10
電子出版ってなんだ？ ―― 小野　朋昭　13
大学出版部ニュース ―― 15
新刊案内'93・7～'93・9 ―― 20
製作の現場から ―― 表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
本冊子中の表示価格は税込みです

読書の周辺

音楽雑考

笠原潔
（放送大学助教授・音楽学）

『北槎聞略』（天明二年〔一七八二〕、江戸への回航中に乗船が難破し、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した後、カムチャツカ、イルクーツクを経てペテルブルグに至り、エカテリーナ女王に謁見し、寛政四年〔一七九二〕、日本に帰還した大黒屋光太夫のロシア漂流体験の桂川甫周による聞き書き）に、光太夫がロシアで実見した楽器に関する次のような一節がある。

「また琴の如くにて五十絃なるを匣の上に造りつけ、匣の前に号を記したる板五十枚あり、譜を案じて板をおせば自ら声を発す。亦匣の下の方左右に消息あり。足にて左の消息をふめば笛の音を出し、右の消息をふめば胡弓の音を発す。また機を転ずれば匣の内にて種々の音を出し楽を奏するもの有。」（巻之九。引用は岩波文庫版による）

描写内容と歴史状況から考えて、これは十八世紀末当時のピアノ（フォルテピアノ）の記述と考えられる。

文章の最後の「また機を転ずれば」云々とはヤニチャール・ストップのことであろう。ヤニチャール・ストップとは、ピアノの中に組み込まれたシンバルや太鼓を鳴らす仕掛けで、当時ヨーロッパで流行していたトルコ軍楽隊の響きを模した音を発する仕組みである（モーツァルトの有名な「トルコ行進曲」も、このヤニチャール・ストップ付きのピアノを念頭に置いて書かれたものと言われている）。

「匣の下の方左右に消息あり。足にて左の消息をふめば笛の音を出し」云々というのは、ペダルを踏むとダンパー操作により音色が変わることを言っているのかもしれないが、この時代のフォルテピアノにしばしば装着されていたファゴット・ツーク（ペダルを踏むと、山羊毛製のバーが弦に降りて、ファゴットのような音色になる）やモデラート・ツーク（ペダルを踏むと皮膜が降りて、鼻にかかったような音色になる）の効果を指している可能性もある（こうした機構は、今日のピアノでは姿を消してしまった）。なお、当時のピアノの中には、現在のピアノのように両前脚の間にペダルを配するのではなく、左右の前脚にペダルを装着したものもあり、光太夫が目にしたのはこのタイプのピアノであった可能性も否定できない。

ピアノに足踏み式のペダルを付けたのは、一七七五年のロンドンのベイヤー製の楽器が最初で、ロンドンのブロードウッドが特許を取ったのが一七八三年。光太夫が帰国す

る前年に亡くなったモーツァルト〔一七五六―一七九一〕が終生使っていたのは、足踏み式以前の「膝ペダル」（足で踏むのではなく、膝で押すペダル）付きのピアノである（初期のピアノに関しては、属啓成、『グラフィック　ピアノの歴史』、音楽之友社、一九八六年、に豊富な写真が掲載されている）。光太夫の談話は、足踏み式ペダルのピアノに関する最古の記述に属する。

いずれにせよ、光太夫は当時の最新式のピアノを目にしていたのである。

☆

映画『ウエスト・サイド物語』の中で、「ジェット団」（ポーランド系不良少年団）と「シャーク団」（プエルトリコ系不良少年団）が「ドクの店」（ドラッグストアー）に集まって決闘の相談をするシーンがある。そこに警官が踏み込み、「シャーク団」の面々は店から追い払われてしまうのであるが、彼らが不貞腐れながら立ち去る時、口笛で吹くのがイギリス国家 God Save the King／Queen の旋律であることは、あまり気付かれていない。彼らはなぜアメリカ国歌ではなく、イギリス国歌を吹いたのであろうか。

結論から言えば、彼らはイギリス国歌のつもりではなく、アメリカの愛国歌『我が国は汝のもの』My Country 'tis of thee のつもりでこの旋律を吹いたのであろう。

一九三一年（昭和六年）に『星条旗 Star-spangled Banner』が国歌 National Anthem として正式に採択される以前、アメリカでは『星条旗』や『我が国は汝のもの』、『ヘイル・コロンビア Hail Columbia』などの愛国歌が準国歌扱いされていた。安政年間にペリーが来航した折にも『星条旗』と『ヘイル・コロンビア』とが国民歌 National Airs として演奏されている（『ペルリ提督日本遠征記』、並びに随行したハイネの著した『世界周航日本への旅』参照）。

My Country 'tis of thee は、イギリス国歌 God Save the King／Queen にサミュエル・フランシス・スミスが一八三一年に歌詞を付けたものであるが、現在でも準国歌扱いされており、アメリカの小学校では朝礼で国旗を掲揚する際、この歌を歌う所が多い。その分、プエルトリコ系移民の子たちにとっても、『星条旗』よりもこちらの歌の方がアメリカを象徴する歌として馴染み深かったのではなかろうか。

「我が国は汝のもの」と言いながらも自分たちを一向に社会に受け入れてくれないアメリカに対する抗議をこめて、「シャーク団」の面々はこの旋律を吹いたのであろう。

☆

古代の日本では「小角」と呼ばれる牛角製の角笛が吹奏楽器として使われていた。

「小角」が中国や朝鮮半島で古くから使われていたことは

高句麗壁画などから分かるが、日本でも古代から軍事用や狩猟用に用いられていたことは、高市皇子の葬送の際の柿本人麻呂の挽歌（万葉集巻二、第一九九番。壬申の乱の際の高市皇子の活躍を歌う）、『養老令』（養老二年〔七一四〕制定）の中の軍防令、『三代実録』元慶五年四月廿五日の条の記事（元慶二年〔八七八〕に出羽の国で起こった蝦夷の反乱による焼失官物の一覧）などの文献を通じて、また、和歌山市井辺八幡山古墳から出土した「小角」を背負った武人埴輪、高槻市昼神車塚古墳から出土した狩で「小角」を吹く力士埴輪などを通じて知られる。『隋書』倭国伝や『日本書紀』で「鼓角」「鼓吹」という時、用いられたのはこの「小角」である。

この「小角」は後の時代になると軍楽器としての地位を「法螺貝」に譲った。

「小角」が使われなくなったのは、遣唐使船の廃止などによって輸入が途絶えたためと思われるが、元来は密教や修験道の宝器であった「法螺貝」が、戦闘用の楽器として使われるようになったのは、いかなる事情からであろうか。

戦闘場面での法螺貝の使用に関する記述が文献に現れるのは鎌倉時代からである。『源平盛衰記』の中の、源氏に同心した熊野の那智新宮の大衆が決起するにあたって貝鐘を鳴らしたという記事、あるいは三井寺の合戦で三院の大衆が貝鐘を鳴らしたという記事あたりが、戦闘の際に法螺貝が使われたことを記す最古の記述と言われる（戦闘以外の場面で使われる法螺貝に関しては、もっと古くから言及されているが）。それらを見ると、法螺貝を吹いているのは、いずれも大衆、すなわち僧兵側の軍勢であることが分かる。新井白石は『本朝軍器考』の中で、上記の『源平盛衰記』の記事の中で大衆が、古来の金鼓ではなく、鐘を用いているのは、寺の鐘を持ち出したものではないか、と推測しているが、それと同じことが法螺貝についても言えるのではなかろうか。

法螺貝が軍楽器として使用されるようになったことの背景には、中世寺社における僧兵勢力の存在がある。

☆

斎部広成が大同二年〔八〇七〕に撰上した『古語拾遺』は、斎部氏に伝承された独特の神話を保存している点で古来注目されている。その『古語拾遺』には、天鈿女命（あめのうずめのみこと）が天岩窟（あめのいわや）の前で俳優（わざおぎ）をなす際、「手に〔鉄製の〕鐸着けたる矛を持ちて」これをなしたという、『古事記』や『日本書紀』には見られない記述があり、また「鐸」字はサナキと訓む旨の注記がある。

この「鐸（さなき）」は、一般に、『説文解字』の「鐸」字の説明に従って、大鈴であると理解されているが、それは間違いであろう。

この鐸を着けた「矛」は、金属性ではなく、木製と思われる。この矛を作った手置帆負（たおきほおひ）・彦狭知（ひこさしり）（訓み方は岩波文

庫版の『古語拾遺』による）の二神は、矛とは別に「大峡・小峡の材を伐り」瑞殿を造り、また笠と盾を作っている。それに対して、鉄鐸を作った天目一箇神は、また、刀と斧を作っている。つまり手置帆負・彦狭知の両神は、天目一箇神が金工神であるのに対し、木工神と考えられ、両神が作った矛は木製であったということになる。そうした両神の作った矛は、民俗例から推察するに、木竿の先に木綿幣を房状に付けたもので、依代としての機能を持っていたと解される（こうした依代としての木製矛の性格は祇園祭りの山鉾に継承されている）。こうした依代としての「矛」に鉄鐸を着けた例が長野県下の諏訪神社系のいくつかの神社（諏訪神社上社、小野神社、矢彦神社、五社神社）に伝世されていることは、大場磐雄、藤森栄一氏らによって既に報告されている。それらの鉄鐸はいずれも鉄板を円筒状に巻いたものであり、中に舌を持つ。これらの鉄鐸が古代にまで遡る可能性は薄いようであるが、これに類した鉄鐸は福岡県のかつて塚古墳（六世紀）、福岡県沖ノ島の祭祀遺跡（古墳時代？）、日光二荒山頂祭祀遺跡（鎌倉時代）から出土している。『古語拾遺』に言う「鐸」は、鉄板を円筒状に巻いて舌を吊したこうした鉄鐸を言うものであろう。

こうしたことは『国史大辞典』（吉川弘文館）の「鉄鐸」の項目で既に明らかにされている。国語学・国文学方面の文献でこれらの研究成果を活かしたものが見当たらないのは、不思議である。

☆

唐代伝奇小説の代表作『遊仙窟』は山上憶良・大伴家持ら万葉歌人たちにも大きな影響を与えたが、この小説の中で、歌を掛け合いながら男女の愛を深めていく点、手近な器物に託して多分に性的な歌を掛け合っていく点などは、歌垣の風習を踏まえたものと思われる。

中国貴州省のイ族は、今だに『遊仙窟』中の歌と全く同種の歌詞で情歌を交わしている。

☆

一九九二年春、東京国立博物館で開かれた「曽侯乙墓」展に細長い五弦琴が出展されていた。これと同じ五弦琴は馬王堆三号漢墓からも出土しており、一緒に出土した竹簡の記載から、これは「筑」であることが分かった。さらに馬王堆一号漢墓の棺画などを通じて、「筑」は棒状の撥で演奏されたことも分かった（中国芸術研究院音楽研究所・人民音楽出版社、『中国音楽史図鑑』、北京、一九八八年、ほか）。

中国の古典では、琴や瑟を指で爪弾くことを「鼓琴」「鼓瑟」と言い、「筑」を演奏することを「擊筑」と言う。「擊」とは棒状の撥で弾く意味であることを、これら一連の発掘は明らかにした。

読書の周辺

酒づくりのはなし

―― 水と米 ――

竹田正久
（東京農業大学教授）

仕込水のはなし

銘醸地に名水あり。〇〇の銘酒は水が良いからうまいなどよく耳にする。蔵では仕込水のほかに洗米やタンクの洗浄等にも水を使うので水質のほか多くの水が湧くことも名水の条件である。神戸市灘区新在家より西宮市会津に至る大阪湾沿岸約一二キロの地域で造られる酒が灘酒（ナダシュ）で、酒のメッカといわれている。その地域でも特に、西宮市の旧海岸地帯に点在する井戸から湧出する「宮水（ミヤミズ）」は名水で有名である。

当然、宮水に科学のメスが入れられた。特に灘酒・白鶴酒造㈱の嘉納成三博士が昭和三〇年代に発表した研究報告を、宮水を語るのに欠かすことはできない。宮水に酒づくりの酵母に必要な燐やカリウムが多く含まれて、酒の質に有害な鉄（着色を促進し、香味を害する）が少なくないことを明らかにした。これぞ宮水の名水たるゆえんであるといわれた。しかし燐、カリウムは白米中から多量にとけだしてくるので水のミネラル量は良水に関係ないことがわかった。

酒造講本（日本醸造協会発行、平成三年）の「酒造用水の条件」（表1）には燐、カリウムなどのミネラル量は記載していない。有害物質の鉄、マンガン（日光着色を促進）量は許容量〇・〇二ｐｐｍ以下で記載されている。亜硝酸、アンモニア、有機物は直接酒づくりに悪影響をおよぼす成分ではないが、多量に存在するときは水源または上流に汚染物質が存在することがあるのでチェックすることをすすめている。以上、酒造講本の「酒造用水の条件」の記載でもわかるように臭気、味に異常がなく、鉄、マンガンが少ない水であれば良水である。

表1　醸造用水としての条件

色沢	無色透明であること
臭気	異常でないこと
味	異常でないこと
pH	中性または微アルカリ性
鉄，マンガン	0.02ppm以下で，含まれないことが最適
有機物（過マンガン酸カリウム消費量）	5ppm以下であること
亜硝酸性窒素	検出されないこと
アンモニア性窒素	検出されないこと
細菌酸度	0.5ml以下であること

最新酒造講本・日本醸造協会編（平成３年５版発行）

嘉納博士が全国酒造場の水七六種を分析した結果では、鉄含有（ppm）は最大量〇・〇五二、最小値〇・〇〇一、平均〇・〇〇五五である。そのなかで〇・〇五二は七六種中一点、〇・〇二七が二点であり、その他

表２　灘地区酒造用水一般分析表

区分 ＼ 井戸別	宮水	魚崎地区井戸水	御影地区井戸水	西部地区井戸水
カメレオン消費量（有機物）(mg/ℓ)	0.9	0.46	1.8	0.14
クロール（〃）	40.0	16.7	34.8	14.8
全硬度（〃）	9.5	4.3	6.85	4.0
Ca 硬度（〃）	7.5	3.2	5.2	3.25
Mg 硬度（〃）	2.0	1.1	1.55	0.75
鉄（ppm）	<0.003	0.005	0.008	0.01
亜硝酸（mg/ℓ）	不検出	不検出	不検出	0.07
硝酸（〃）	22.5	13.4	16.0	9.0
アンモニア（〃）	不検出	不検出	不検出	0.10
pH	7.0	6.90	6.93	
分析年月日	34·1	34·5	33·12	33·12

醸造論文集・日本醸友会，15輯（昭和35年）

の水は基準の〇・〇二以下である。鉄含量からみても全国の酒造場の水は良水ということができる。酒の鉄は米、水以外、例えば鉄管のサビやタンクの傷痕などから来るのが多いので作業上の注意が大事といわれている。

名水・宮水については、江戸末期に銘酒・桜正宗（サクラマサムネ）の元祖・山邑太左衛門（ヤマムラ）が酒蔵を西宮と魚崎にもっていた。西宮の蔵がいつもうまいことに気がついたので原料米を同じにして蔵人をかえてみたが変化がなかった。そこで西宮の水（宮水）を送って魚崎で造ったところ西宮と同じ品質の酒を得て、江戸の市場でも大好評を博することになった。一八四〇年（天保一一年）のことである。以来、霊水・宮水の発見の動機として語り伝えられてきた。

そこで知りたいのが魚崎の水の成分特に鉄の含量(ppm)はどうであったかである。灘酒・桜正宗㈱の蔭山公雄博士が宮水と魚崎の水を分析したのを昭和三五年に報告している。（表2）それによると宮水の鉄〇・〇〇三以下に対し魚崎の水は〇・〇〇五である。後者の方が多いとはいえ上限度の〇・〇二以下である。蔭山博士は同報告文のなかで「灘で宮水と魚崎の井水との比較試醸をいたしますと発酵日数が二日くらい違う。場合によりますとあまり差がないという結果も出ております。このような結果の相違は灘の酒づくりが大体に強い醗酵をさせる型でありますために、宮水と他の井水の差以上に醸造法に特徴が強く現われ、原料水の違いがあまり出てこない場合もあるのではないかと思います」と述べている。

山邑太左衛門の語り伝えにあるような、宮水に変えただけで明らかに酒質を向上させることができるであろうか。今も昔もＰＲ競争は同じ、お叱りをうけることになるが、うまく宣伝に利用したのが名水・宮水のおこりであったかも知れない。

灘酒・大関酒造㈱、布川弥太郎博士（元醸造試験所）の著書での文章を次に紹介する。

「結局、水質の良し悪しは、主として鉄などの酒づくりに有害な成分があるかないかで判断されるようになりました。宮水には酒づくりに有害な鉄やマンガンがほとんど含まれていません。これが、宮水を霊水たらしめているゆえんなのです。現在では、水から鉄やマンガンなどをとり除く浄水法がいろいろ開発されています。こうなると、どこでも良い水が得られ、良い酒ができるわけで、宮水の神通力も色あせてきます。どこそこが銘醸地という地域に注目するより、どこそこの酒造家の酒は銘酒であるといった風

に酒造技術に注目した方が良いということになります。

原料米のはなし

酒造好適米といえば山田錦、雄町、たかね錦、五百万石などの品種が知られている。好適米で造った酒はうまく、そして、好適米以外の米を一般米、地米と呼んでいるが、酒は良くないと信じられている。

好適米と一般米の化学分析の違いは明確になされていないが、酒造講本には、「酒造好適米の玄米は一般に心白のある大粒米で吸水性が良く、麹を造るときに麹菌が米の中心部に繁殖し、もろみ（醪酵中）で溶けやすい性質である」と記載されている（心白とは米粒の中心部に白色不透明の部分がある米をいう。心白部はデンプン粒が粗につまっていて白色にみえる）。

元農大教授、野白喜久雄先生は、明治末期の精米方法としては専ら杵搗が用いられ、精米度の低い米を用いた時代に、基準が作成されたもので大粒心白米は、糠層が薄く組織が軟かくて精米時間が短かく、しかも心白構造のため吸水が高かったので好適品種にされたと考えている。そして精米技術の発展にともない一般米にも高精白米が得られるようになった現在では、好適米の基準がうすらいでくる。何故ならば一般米でも精白度を高くすることで吸水性もよくなり、前記好適米の基準に合致するようになるからと述べている。そして好適米で造った清酒は一般米のそれにくらべて品質優良であるという説は、野白先生らの実験によって否定されている。

仕込に用いるのは、白米であるのに玄米で好適米の基準を設定しているのもおかしい。精米、洗米、浸漬（水に漬けておくこと）で適当に吸水した白米を蒸籠に入れて、下から蒸気を通して蒸米を造る。この蒸米を仕込に用いるので、良い蒸米をつくれば一般米と好適米との区別がなく良い酒ができることになる。良い蒸米の基準は「十分に蒸せて、粘りのないさばけがよい」とされている。

食品良好とされる品種は粘りがあっておいしいが、酒米としては適しないといわれている。それは蒸米が粘ると作業がやりにくく、麹菌の繁殖がよくないからである。農水省生物研の渋谷直人先生の研究によると酒米として知られている品種は、デンプン粒をかこんでいる細胞壁中にグルコマンナンというセンイ様の物質が多く、粘り気のあるおいしい米は少ないという。酒米のデンプンは細胞壁がかたいので、粘らず、さらついた蒸米ができるので酒づくりに用いやすいことになる。グルコマンナンは糖類が多く結合したもので酒質には全く影響しない。ササニシキや秋田小町の品種は、粘りがあっておいしい米であるが、粘らないように吸水を調整してサラついた良い蒸米をつくることを野白先生らが考案しているので、おいしい酒を造ることもできる。酒造講本では、酒米について次のように結論している。「一般米でも高精白米にすることで好適米の性質を

得ることができる。酒造好適米は一般に高価であり、したがって高価な原料で酒づくりをしていることが、従業員の志気高揚となり間接的に酒質の向上に役立つ」と記載している。

吟醸（ギンジョウ）づくりでは高精白米の使用が必須条件であるが精米歩合（精米して得られた白米の量を玄米の量で割り、百を乗じた数）が五〇％から三五％の範囲で、酒造場で異なる。三五％まで下げる必要があるのか、と疑問視する学者も多いが、高精白米にすれば酒質に好適米と一般米に差異がないことを紹介したが、これが吟醸酒づくりに適用されるのか？　これからの課題であるが、すでに一般米の高精白米で仕込んだ吟醸酒が市場に見られる。（高精白が低精米歩合、低精白度が高精米歩合となる。）

酒仕込の原料は蒸米、米麹、水である。米麹は蒸米に麹菌が繁殖したもので米デンプンを分解する酵素を含む。蒸米は米麹の酵素で糖分に分解され、酵母のアルコール醗酵によって酒となる。仕込む時は、蒸米と米麹の比が一般に七・七対二・三（米麹使用歩合二三％）である。米麹を二三％使用すれば、デンプンを分解する酵素は十分量であり米麹使用割合は一五％まで下げてもよいとの報告がある。蒸米の性質によって麹菌が繁殖しやすいとか、繁殖しにくいなどは酵素量から考えると麹の出来具合はあまり気にすることはない。

私たちが食べているご飯は柔かくすぐ消化されるが、ご飯を空気にさらしておくと徐々に乾燥して固くなり食べても消化しない。これは元のβ・デンプンにもどったためである。α・デンプンが、β・デンプンにもどるのを防ぐには、蒸した後、急激に乾燥すれば、元の生米に戻らず α・デンプンのままで貯蔵できる。この様に加工した白米をα・米（アルファ・アカイ・マイ）（α化米）と呼んでおり自社で洗米や蒸しを省略することができるので、蒸米の代りにα・米を用いている蔵もある。業界では「α・米仕込（アルファ・マイシコミ）」と呼んでいる。

蒸気で蒸すかわりに白米に水分を含ませて、乾燥熱風（二九〇℃）で瞬間処理すれば、水分も少ない前記と同じα・米となる。宝酒造㈱では蒸米の代りに用いて、この仕込を「焙炒造り（バイショウヅクリ）」と呼んでいる。

白米を粉砕し水と液化酵素を加え一〇〇℃に近い高温で粥（カユ）状にしてから米麹を加え、醗酵させて造る酒がある。月桂冠酒造㈱で開発された仕込で「融米造り（ユウマイヅクリ）」と名付けている。

従来の蒸米仕込からα・米仕込、焙炒仕込、融米仕込など科学の進歩で酒づくりも変ってくるが、蒸米についての考えも「生米（ナマゴメ）が残らないように蒸す」という具合に簡単な基準になっているのかも知れない。

しかし吟醸づくりではきびしい基準があって簡単でない。蔵によっては蒸米が溶けすぎても困るので特に注意がはらわれるなど吟醸用蒸米づくりの基準は蔵で異なり、吟醸づくりの秘訣でもある。

『総合図書目録』『30年の歩み』の刊行を終えて

寺山　浩司
（早稲田大学出版部）

大学出版部協会は、今年創立30周年を迎えた。これを記念して、『大学出版部協会総合図書目録』と『大学出版部協会30年の歩み』が刊行された。双方とも「創立25周年」記念を継ぐもので、その後の五年が跡づけられ、増補されている。

●総合図書目録

協会加盟20大学出版部の図書全七五八六点を日本十進分類法にならいつつ、協会独自の25分類に整理し、書名、著訳編者名、判型、頁数、定価、発行年、発行所、ＩＳＢＮを一覧にし、書名索引を付す。

「25年」時に比べ、収録書目で一二五八点の増加。また、いわゆるニューメディア商品、ビデオ・テープ、フロッピー・ディスクが新しく加わっている。

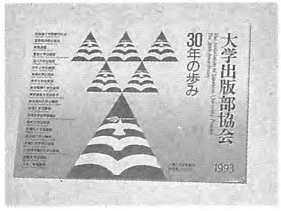
なお、目録の作成に当って、日本書籍出版協会のご好意により、『日本書籍総目録』から基礎データのご提供をいただいた。記して謝意を表します。

●30年の歩み

協会の創立から現在に至る「年表」、加盟出版部の概要、各出版部への著者等からのコメント、大学出版部の誕生から今後の展望までを国内外に目配りした「大学出版部小史」、新聞・雑誌に取り上げられた大学出版部の記事を採録する「マスコミのみた大学出版部」等を収録する。

四半世紀を超える協会の活動が一望でき、加盟出版部の特色を知ることができる。また、そうした協会や各出版部の活動が著者やマスコミにどのように受けとめられてきたかを知る手掛りを与えてくれる。

一九六三年六月、八つの大学出版部と二つの学術団体は「大学出版部協会」を創設した。三〇年後の現在、協会には二〇の大学出版部が加盟している。この数が多いとか少ないとかではなく、加盟出版部の総力によって「図書目録」を纏め、「年史」を編みえたことに目を向けたい。そして、こうした手弁当的作業を支えたのは、編集部会メンバーの「われわれの協会」という意識、親しみだったことを付け加えたい。



大学出版部協会
三〇年の軌跡

関野 利之
（玉川大学出版部）

大学出版部協会は一九六三年六月一一日に結成され、今年がちょうど三〇周年にあたる。この三〇年をあえて区切るとすれば、三期に分けてみたい。第一期は、六三年の設立から大学紛争の影響を受けたこともあって活動らしい活動を中止した六七―七〇年を含む七一年まで。第二期はアジア太平洋地域大学出版部会議が開催された七二年から、第三期は二〇周年の前年の八二年頃から今日までである。

第一期はいわば準備期間といえよう。東京大学出版会の箕輪成男氏（大学出版部協会初代幹事長）が、アメリカ大学出版部協会（ＡＡＵＰ）を歴訪、ＡＡＵＰ国際会議に参加するなど、着実な活動が積み重ねられた。

そして七二年、協会活動の転機となったアジア太平洋地域大学出版部会議と刊行図書展が開催された。韓国・香港・シンガポール・マレーシア・インドネシア・クメール・タイ・インド・パキスタン・フィリピン・台湾・アメリカ・カナダ・イギリス、そして日本の一五ヵ国、約六〇名の参加だった。刊行図書展の出展点数は日本側が一〇〇〇点、国外が一〇〇点。このとき販売委員会（現営業部会）が設けられ、目録、新刊案内の共同発送を初めておこなっている。また東京・大阪で展示即売会を開いている。

営業部会活動の原型はこの頃に固まったといえよう。現在は、(1)新刊速報の発行・配布（当月刊行された新刊書一覧を翌月一〇日までに作成し図書館および主な書店、取次店に送付し、新刊の情報を提供し選書のデータとして活用していただく）、(2)新刊の見計らい納品（主に大学図書館に新刊刊行時に自動的に納品し現物による選書、購入をお願いする、現在五〇余館に実施）、(3)図書館の蔵書調査（未購入の図書を調査し購入を要請する）、(4)合本目録の作成送付（毎年年初に図書館、有力書店、取次店に送付し購入の資料として活用していただく）、(5)書店、取次店との懇談会、会員相互の情報交換、八六年からはじまった編集・営業合同研修会、を継続的活動の柱としている。

七三年には第一回と第二回の研修会がおこなわれた。以後、夏の泊りがけの研修会が恒例化し、講師を招いての研究会、各出版部のケーススタディの報告、協会活動の方針の検討などをおこなっている。七六年には国際出版連合（ＩＡＳＰ）が京都で開かれ、三大学出版部が参加している。一五周年（七八年）では全国縦断ブックフェアを行った。その前年七七年には第一回編集部会が開かれている。

大学出版部協会夏季研修会および第12回日・韓大学出版部協会
合同セミナーの出席メンバー（1993年８月27日，箱根・対岳荘）

大学出版部の使命の一つに学術研究書の刊行がある。貴重な研究成果を埋もれさせず後世に伝えることは、大学とその出版部の存在理由に深くかかわっている。この学術書を対象に、日本生命財団が八〇年、大学出版部協会に対して一括して出版助成を行う制度を設けた。経済的な事情からなかなか日の目を見ないような優れた学術書に対して援助するという趣旨である。当初は年間で総計三〇〇〇万円だったが、段階的に増額され、今年からは五〇〇〇万円の助成になっている。この助成を受けて出版された図書はこれまでで一五八点に及んでいる。

日本生命財団からこの助成を受けるために必要な諸々の手続き・手順、原価計算はもちろん、申請する企画の中身の検討などまでをおこなう担当者の集まりがこの制度発足と同時に随時もたれていたが、昨年から刊行助成部会と名称を変えた。このほかに、文部省を初め学術図書の出版に助成をおこなってもらえる財団等があるのではないかというような研究や、全国の私立大学を対象に「学術研究成果刊行助成の現状に関するアンケート」を実施している。

八一年、韓国大学出版部協会一行が訪日し懇談会を催した。以後毎年相互に訪問しあってさまざまな課題について合同のセミナーを開いている。また同年、中国で第一回の日本大学出版物展覧会を開いている。協会の呼びかけで参加した大学は三八八校、出展した図書二九五〇点、紀要七五八点、大学要覧類二三〇五点、通信教育教材六五五点、

全部で一万六〇〇〇冊あり、これらは展覧会終了後中国側に寄付された。この模様は中国側とNHKのテレビニュースでも紹介された。日本の大学出版部協会は中国大学出版社協会の結成（八七年）に力を貸している。

八一年から編集部会も軌道に乗ってきて八三年の二〇周年事業の準備もあってその前年頃から定期的な会を催すようになった。「二〇年の歩み」の企画・原稿依頼、記念講演会の準備と開催を通じて、まず首都圏の各校の連携が深まっていった。編集部会はかねてからの懸案だった協会の機関誌「大学出版」の編集製作に着手し、八六年の春、創刊号が発刊された。最初の七、八号あたりまでは変則的であったが、現在は首都圏校が定期的に例会を開いて打ち合わせをし、輪番で編集と製作を担当するシステムが定着した。八八年には「二五年の歩み」、今年は「三〇年の歩み」を編集部会で編集・製作した。

こうして編集部会共通の実務ができたということもあってであろう、編集・製作のノウハウなどつっこんだ情報交換も次第に行われるようになった。編集者の集まりというと、それぞれの出版部の企画など「企業秘密」が関係したりしてなかなかお互い腹を割って話せないものである。そういう意味では編集部会（前述の刊行助成部会もそうであるが）があることは大学出版部協会の大きな特色であるといってもいい。

講演会などの記念事業、ブックフェア、編集部会での協会刊行物の編集製作と、現在の協会活動のスタイルがでそろったのが二〇周年の頃で、八二年を第三期が開始された年ととらえてみたわけである。

八二年はまた、アメリカ大学出版部協会一行が来日し、共同でシンポジウムをおこなった年でもある。同時に丸善本店で日米大学出版局刊行物展を開催している。

現在までは日本の大学出版部協会はアメリカ、韓国、中国の大学出版部と交流する機会が多かった。とくにアメリカの大学出版部からは今後も学ぶべきことはたくさんある。たとえばアメリカの大学出版部は一次文献、学術研究書の出版がすべてで、教科書は教科書専門の出版社が出すということや、財政的な問題など、大学出版部の活動をどの方向へシフトさせていけばいいのかということに大きなヒントを提供してくれている。中国、韓国との場合は、まだそこまで共通した意識で議論がおこなわれていない。しかしこの三国はまだいいほうであって、これらの国以外のアジアの大学出版部や、ヨーロッパやそのほかの大学出版部はどのようになっていてどういう活動をしているのかについて、われわれは何らまとまった知識をもっていないありさまである。国際的な交流を深めるための準備にもこの種の調査をぜひおこない、とくにアジアの大学出版部とどのように交流していくかを提起していく必要があると思われる。

電子出版ってなんだ？

小野　朋昭
（東海大学出版会）

●出版の新たなる市場

このごろよく耳にする言葉に電子出版というものがある。出版業界に携わっている人ならば一度は聞いたことがあるだろう。しかし、「電子出版って何だろう」ということになると、漠然としたイメージや個々の商品名ぐらいしか浮かんでこない。明確な定義がわからないのである。

ある人は「ワープロで版下を作れば電子出版だ」といい、別の人は「電子出版ってＣＤ－ＲＯＭのことでしょ」といった具合に、その意味するところに混乱が起こっている。

言葉の意味がわからないときは辞書を引けばいいわけだが、『広辞苑　第四版』によると、「編集・印刷の過程をコンピューターによって管理した出版のこと。また、ＣＤ－ＲＯＭなどのニューメディアで大量の情報伝達をおこなうこと。」とある。しかし、こう言われてもなお釈然としない。

これは、多種多様の業種が一時期に参入してきた新たな市場であるために、各社それぞれの思惑によって概念が広がっていったためではないだろうか。現に、電子出版業界の主要なメンバーは、出版社、電機メーカー、印刷会社、情報産業、ソフトハウスなど、さまざまな業種が入り乱れている。

●電子出版には見えない電子情報が介在する

通常、我々が出版という場合、書籍や雑誌などのいわゆる紙媒体の出版を意味している。つまり綴じ本が一つの流通単位になっている。これに対して、電子出版には多様な出版媒体が含まれているのである。大きく分けると次の三つがあるだろう。つまり、

① 電子編集（紙媒体）
電子編集機（ワープロなども含む）を利用した、いわゆるＤＴＰやインハウス出版といわれるもの。また、電算写植を使った出版も電子出版といえる。

② 有形電子媒体
ＣＤ－ＲＯＭやＩＣカードなど電子媒体に情報を収録して出版するもの。文書をフロッピーディスクに収録して販売しても電子出版である。

③ 無形電子媒体
通信回線を使って情報を提供するもの（オンラインデータベース）。この形態の中には放送に近いものも含まれている。

などである。個人的にはダイヤルＱ^{2}なども、出版の媒体になり得ると思っている。

では、これらの共通点は何かといえば、それは、情報

（出版物の内容）がある時点において人間には直接理解できないコンピュータデータとして存在するということではないだろうか。まさにこの共通点こそが電子出版の広い意味での定義になるであろう。

●マルチメディア化へ

いま述べた電子出版の三つの媒体を眺めてみると、一つの方向性が見いだせる（図1）。

それは、オンラインデータベースで情報を提供するに当たっては、すでに情報が電子的な記憶媒体（CD－ROMなど）に蓄えられていなければならず、また、これらの記憶媒体に情報を記憶させるためには電子的編集が必要であるということである。簡単に言い換えれば（乱暴な言い方ではあるが）、電算写植で組版した書籍は、電子媒体に移行可能であり、また、逆に電子媒体から紙媒体にできるということでもある。つまり、情報媒体の多元化が可能なのである。

文芸書も通信回線によって販売される時代が来るかも知れない。これこそ通信販売である。読者は、画面で読むだけではなく、級数・字詰・行間などを細かく指定してプリントアウトし、きれいな装丁でもつければ、世界でただ一冊の自分だけの本を持つことができる。もちろん書籍（紙媒体）がなくなるわけではない。

●大きな市場が開けるか？

ここまで読んで、「なーんだそうか、わが社も既刊書のCD－ROM版をつくろう!!」などと思われた人もいるかも知れない。しかし、実際はシステムの標準化と低価格化という点でまだ問題もあり、大きな市場が確立されていない現状では、すぐに利益を考えることはできないだろう。

ただし、電子出版市場は、未採掘の巨大な金鉱であることには間違いない。効果的な採掘法と鉱石の利用法を確立するために、さまざまな企業が試掘をしながら技術開発を行っているのである。この市場はどのように発展していくかわからないが、少なくとも出版業界に携わる者としては興味深く見守っていこうではないか。

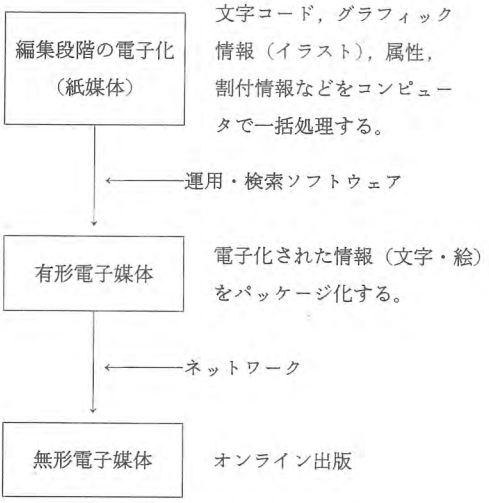


図1　電子出版の3つの出版媒体の関係

北海道大学図書刊行会

▼東正剛・阿部永・辻井達一編『生態学からみた北海道』（B5判・九七八五円）北海道をフィールドに活躍する35名の気鋭の生態学者が、自らの研究内容をわかりやすく解説している。本書を読めば北海道の生態学研究のすべてがわかると、他地域の研究者の間でも評判である。▼東正剛・大沢晃・金川加奈編『Biodiversity and Ecology in the Northernmost Japan』（B5判・九二七〇円）は、ラムサール国際会議を記念しての前記書の英語版である。これまで北日本の植相や動物相が簡潔に紹介された本がなく、外国人研究者に好評であった。▼環境問題の関係書としては、九一年度日生財団の出版助成を受けた畠山武道著『アメリカの環境保護法』（A5判・五九七四円）が引き続いて好評ではやくも三刷である。

聖学院大学出版会

▼現在校正中の新刊を御紹介します。『光の子と闇の子――デモクラシーの批判と擁護』（ラインホールド・ニーバー著　武田清子訳）『ラインホールド・ニーバーの歴史神学』（高橋義文著）『シカゴ――大都市政治の臨床的観察』（C・E・メリアム著　和田宗春訳）発売は11月から12月になる予定です。▼ニーバーはアメリカの政治倫理学者であり、同時に神学者でもありました。デモクラシーの重要性、正当性を論じた『光の子と闇の子』、彼の政治思想を根底から捉えようとする『ニーバーの歴史神学』、また都市の発展の中でどのような政治機構・政治活動が見られるのかを観察した『シカゴ』。変化の兆しが見えてきたような現代日本の政治状況のなかで読まれてしかるべき本と考えます。

慶應通信

▼伊藤隆二著『福祉のこころと教育』（定価一八〇〇円）福祉教育の主唱者である著者のすぐれた論文集。「福祉のこころ」とは他者に尽くす心であり、報恩のこころである。目に見えないがために、称讃されることもなく、とりたてて評価されることもない。しかし、世界平和と人類の福祉にはそれが根幹をなしている……と著者は断ずる。正に卓見というべきか。▼須永和宏著『不登校児が問いかけるもの』（定価一七〇〇円）家裁の調査官の仕事に永年たずさわり、又不登校児の父でもある著者が、多くのケースと自らの体験に基づいた「不登校論」。不登校児を理解するためには、その原因を探すのではなく、かれらのそばに下りてゆき、かれらの目の高さに身をかがめることが必要ではないか、と説く。

産能大学出版部

▼社会心理学、組織心理学の権威でありMITスローン経営学部教授であるE・H・シャインの名著として知られるProcess Consultationの全面改訂版である『新しい人間管理と問題解決』――プロセス・コンサルテーションが組織を変える（エドガー・H・シャイン著　稲葉元吉訳　四六判　三八〇〇円）が完成した。▼『目標達成と動機づけのマネジメント』――人的資源の育成と活用（G・オディオーン著　宮城まり子　関郁夫共訳、四六判　三五〇〇円）を出版。行動科学の世界的権威である著者が目標による管理導入・非導入企業を問わず企業のトップから管理者のための指針となる書であり、ウォール・ストリート・ジャーナル紙でイヤーズ・ベストに輝いた名著である。

玉川大学出版部

▼中西　通編『能面型紙集』（B4判・豪華桐箱入り・能面型紙二五セット各特製袋入り・限定版・七七二五〇円）。丹波篠山の能楽資料館所蔵の面を中心に、作者・造形・彩色とともに、各年代を代表する名作を厳選して収録。万全を期すために、本型紙をもとに採寸者・広尾次郎市が実際に面を打つという試みも行なった。また、面の造形、彫刻の特徴・彩色の特色などを工芸技術の視点から丁寧に解説した能面制作ノートを付し、面を打つうえで、精密で正しい知識を提供している。

中央大学出版部

▼塚本重頼『労使関係法制の比較法的研究』（定価二二六六円）

中央労働基準審議会会長、東京地方労働委員会会長等を歴任した著者は厖大な量の著書を公刊して来たが本書は、合衆国・カナダ・アジア諸国の労使関係法制、およびこれらに関する比較法的研究成果を体系的に整序した遺稿を含む論文集である。

▼田村五郎編訳『ドイツ現代家族法』（定価三二九六円）

第二次大戦後、ドイツの家族法はどのような変革を経て現在に至ったか。また、ドイツの現代家族法を貫く中心思想は何か。この思想はどのような法律として具体化しているか。これらの法律はどのような問題点を抱えているか。以上の問い掛けに、ドイツの家族法学界で活躍中の著名学者たちが、本書で、八編の論考を通じて明快に答える。

東海大学出版会

▼一九八〇年代後半から大きく取り上げられた地球環境問題は、人類にとって最大の課題となっている。とりわけ今大きくクローズアップされているのは、学齢期および青年期を貫く、生涯教育としての環境教育であろう。そこで今回刊行した「環境教育シリーズ」は、研究者、教育者、市民レベルでの活動者など、あらゆるジャンルの専門家が一堂に会し「環境教育」に関する提案・実践を報告し、それを集大成したものである。

大来佐武郎・松前達朗　監修『環境教育シリーズ』全5巻

①子どもと環境教育　責任編集阿部治②学校と環境教育　責任編集岡島成行③社会と環境教育　責任編集大田堯④地球と環境教育　責任編集藤原英司⑤科学と環境教育　責任編集松前達朗

A5判　セット価一四四二〇円

東京大学出版会

▼新シリーズ『アジアから考える』全七巻の刊行を始めた。近世にまでさかのぼって、アジアの内側から世界史的な視野の拡大をはかることと、これまでのアジア論・アジア研究の内なる「日本」を逆照射したいと考えている。

未完のまま推移したアジアは、世界をどう見てきたか？　広く中国・朝鮮・日本・東南アジアそれぞれを鏡として、相互認識のギャップを浮き彫りにしたい。近代以降、われわれ日本人の対アジア観ほど〝危うい〟自己意識はなかったのではないだろうか。

編者は、溝口雄三（中国思想史）、浜下武志（中国史）、平石直昭（日本政治思想史）、宮嶋博史（朝鮮史）。六年にわたる研究会をへて企画化したもの。

（予価　各三〇九〇円）

東京電機大学出版局

▼一九九〇年代は「脳の一〇年」と呼ばれるほど、「脳」に対する研究の機運が高まっている。この背景には、「脳」研究が生理学、解剖学、分子生物学のみならず、工学、物理学、数学、心理学などといった多岐にわたる学際性をもつことが明らかになったことがある。今や「脳」研究はあらゆる分野から注目されており、各方面からその未知なる可能性に対する挑戦が始まっている。ここに挙げる二冊は、それぞれ「カオス」と「気功」という切り口で「脳」に挑んだものである。

▼合原一幸編著『ニューラルシステムにおけるカオス』（定価三九一四円）―脳とカオスのかかわりを探る。

▼町好雄著『「気」を科学する』（定価二〇六〇円）―気功と脳のはたらきを解説。

東京農業大学出版会

▼学校法人東京農業大学は『東京農業大学百年史』（七五七頁定価五千円）を編纂刊行した。

明治二十四年三月、東京市麴町区飯田河岸（現在のＪＲ中央線飯田橋駅構内）で、「育英黌」という小さな学校が誕生した。設立の母体は徳川育英会（会長は榎本武揚）、これが東京農業大学へと発展するのである。

東京農業大学は、飯田河岸から大塚、そして渋谷の常磐松へと移転して行くが、第二次世界大戦が間もなく終結を迎えようとしていた昭和二十年五月二十五日、米軍の東京大空襲によって、学舎はすべて灰燼化した。

第二次大戦の敗戦後、この地世田谷に移ったのである。この一冊の中には、経営に苦しみながらも発展した、東京農業大学の歴史が、圧縮、記録されている。是非一読して下さい。

法政大学出版局

▼フレデリック・ダグラス自伝『数奇なる奴隷の半生』

岡田誠一訳……一九五七円

▼著者は一八一八年、奴隷の子として生まれ、南部の奴隷市場で幾度も売買される。二〇歳のとき北部へ逃亡し、南北戦争後は奴隷解放運動に貢献した。それが認められて外交官に登用され、八九年にはハイチ駐在アメリカ公使となった。▼独学で文字を覚え、幼時から逃亡までの半生を綴った本書は奴隷自身の手になる初の奴隷制の証言であり、その豊かな物語性と貴重な歴史性によって、一八四五年の初版以来約一五〇年にわたる超ロング・セラーとなっている。▼簡明な奴隷解放史をなす訳者あとがきを付す。

放送大学教育振興会

▼放送大学教育振興会で取り扱っている「ビデオ教材」は現在、放送大学の授業科目ビデオ29教材ならびに放送大学特別講義ビデオ74教材、そして文部省放送教育開発センターの制作した教師教育ビデオ84教材と高専用ビデオ6教材である。

▼販売先は国公私立大学をはじめ、教育機関、地方公共団体、民間企業などである。高専用ビデオ教材『生命科学』『新素材』などは大学・短大、そして民間企業の研究所などで、特に興味と関心を呼んでいる。

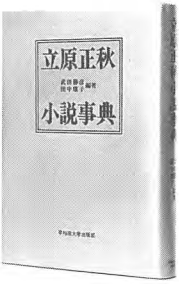
▼平成4年度の販売ベスト5は次の通り。『情報通信技術の歩み』(1)のろしから再び光へ）(2)光・衛星・ディジタル）『砂漠の緑化』『熱帯多雨林の生態』『フロンによるオゾン層破壊』。以上、いずれも放送大学特別講義の教材である。

明星大学出版部

▼戦後教育史研究センターが発足して十周年目を迎える本年、十周年記念事業として、シンポジウム、研究発表が計画されているが、その一環として記念出版を刊行する運びとなった。第一弾は十月刊行の『戦後教育改革通史』である。内容を見ると米国による対日占領教育政策の準備、改革を担った人々――文部省とCIEの人物像、教科教育の改革、教職員制度の改革、その他の改革、となっており、戦後教育史の現在の研究水準を網羅した書となっている。

▼二神重成『国際開発政策―序論』筆者は、永年世界銀行で途上国の開発援助にかかわってきたこともあり、ODA政策、それも世界銀行を中心とした。国際開発の意義、実施、国際開発の協力、資金の活用等がもり込まれた書。

早稲田大学出版部



▼武田勝彦・田中康子編著『立原正秋小説事典』（定価六八〇〇円）立原文学の全貌を明らかにする事典。四一九六項目を収録。すべての短編・長編小説を取り上げて、鑑賞・登場人物・舞台・参考の全四部で構成する。

▼大矢雅彦『アトラス　水害地形分類図』（定価六一八〇〇円）洪水・高潮などの水害状況を予測する画期的な地図帳。B3判の見開きで4色～12色刷の地図三〇余図を収める。主な収録地図は、石狩川・東京都葛飾区・古利根川・狩野川・木曽川・京都盆地・寝屋川・九頭竜川・筑後川・ナイル川など。

名古屋大学出版会

▼J・ステュアート著／小林昇監訳／竹本洋他訳『経済の原理―第3・第4・第5編』（定価一五四五〇円）スミス『国富論』に先立ち、理論・政策・歴史の諸領域を統合した最初の経済学総体系の本邦未訳部分（貨幣論・信用論・租税論）の全訳。経済学が混迷を深める現在、その根源的課題に答える孤峰の古典。

▼毛里和子著『現代中国政治』（定価二五七五円）中国とは何か、どこへ行くのか。共和国誕生から開放体制にいたる政治現象のメカニズムとその全体像を、多角的かつ明快に概説する。

▼M・ミッテラウアー＆R・ジーダー著／若尾祐司他訳『ヨーロッパ家族社会史―家父長制からパートナー関係へ』（定価二四七二円）家族サイクル論の視点から、ヨーロッパ家族の過去と現在をグローバルに対比する。

京都大学学術出版会

▼近代経済学の終焉が叫ばれて久しい。諸々の近代経済学が批判に晒されたが、スラッファ経済学のみは、批判の束より免がれているかにみえる。何故か。本書はスラッファ研究の第一人者が、その秘密――彼の寡作と寡黙の故にそれは一層の謎なのであるが――を、彼と交渉のあった人々（ケインズ、グラムシ、ウィトゲンシュタイン）、彼の論敵ハイエク、或は彼の経済学上の一源流たるリカード、等々との関わりのなかから探ろうとするものである。スラッファ経済学の透明な空間、しかし、その透明さの中に、彼のブラック・ホールがあるかにみえる。それをもスラッファ経済学の思想的背景のなかで明らかにするものである。『スラッファ経済学の現代的評価』菱山泉著、定価三二〇〇円、福井県立大学研究叢書Ⅰ

大阪経済法科大学出版部

▼『河内地域史―弥生時代の河内―』（仮称）著者：村川行弘・小林博他

朝刊を開いて、「○○鏡○○古墳より出土」とか、「△△遺跡新発見！」の見出しを目にすることも今や習慣となった感さえする。古代史ファンにとっては贔屓の球団、いやJリーグチーム勝利の朝よりうれしい知らせだろう。ブームは続くようである。おかげで前作『河内地域史―総論編―』も小さき我出版部にとってはヒット作となった。

柳の下になんとやらの我部の皮算用とは無関係に、河内地域研究会の手による第二弾弥生時代編を晩秋には完成する予定。北・中・南河内、和泉、摂津の弥生遺跡や生活・文化に、新しい視点を加えるものと思う。

本シリーズは今後とも続々と刊行予定、こうご期待のほど。

関西大学出版部

▼福井七子・上田誉志美訳『さまよえる人　ルース　ベネディクト』（定価四〇〇〇円）名著『菊と刀』の著者ルース　ベネディクトの生涯をアメリカ文化史研究の立場から基礎的な伝記資料に基づき分析・究明。人類学者である前に一人の個性的な詩人・人文学者、孤高のフェミニストとしてベネディクトのありのままの姿を詳述。特にアメリカの戦時研究に関わった経緯の後半は圧巻である。▼植松健郎訳『ぼくらは囚人だ』（定価七〇〇〇円）一九〇五年～一九一九年までのドイツ激動期を記録した包括的ドキュメント。ボヘミアン詩人の自叙伝ながら、このころの人間と時代を示す客観的資料として歴史家も利用する貴重な記録。軍隊内部、革命政府の内情が窺える。〔日本図書館協会選定図書〕

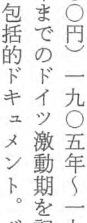
九州大学出版会

▼岡橋保著『貨幣数量説の新系譜―マルクス貨幣信用論の俗流化批判』定価三三九九円。「岡橋保先生は、この『貨幣数量説の新系譜』の校正中、五月一七日逝去されました。行年八八歳でした。このご高著は、先生のご著書では一七冊目にあたります。ご病床のなかでも、先生は最後までこのご本の刊行に意を用いて校正を重ねておられました」（深町郁彌「追記」より）。俗流化の極にある貨幣数量説の根底的批判。▼石塚杉男著『資本と時間―オーストリア派資本理論の研究』定価五九七四円。ベーム＝バヴェルクが体系化し、ヴィクセル、ハイエクなどが受けつぎ、ヒックスの新オーストリア理論に至る、近代経済学研究の中核をなすオーストリア派資本理論の流れを体系的に整理し、集大成したライフワーク。

AJUPニュース

大学出版部協会前幹事長である故・斎藤至弘氏の遺稿集『冬うらら』が一周忌となる六月三〇日に東京大学出版会より発行された（非売品）。タイトルは、斎藤氏の「古書展で　怒り鎮めり　冬うらら」という句に由来するという。

白いカバーをまとった本書は、故人が生前に書き残した原稿六三点を収録。出版界への思いを綴ったそれらの作品からは、編集者としての真摯な生きざまが滲み出ている。



新刊案内 '93・7～'93・9

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
シカ類の保護管理―ヨーロッパ・北アメリカにおける理論と実際―　北海道農政部監修・大泰司紀之編訳　二五七五円
ドストエフスキー裁判　中村健之介編訳　四九四四円
聖と俗の交錯―宗教学とその周辺―　土屋　博編著　二四七二円
建築家のための熱環境解析入門　荒谷　登　二五七五円

■聖学院大学出版会

■慶應通信
土地大国イギリスの終焉　高橋　裕一　三〇〇〇円
地方制度と生活意識―明治期村落の共同意思形成について―　大淵　英雄　五五〇〇円
トリパリウムと労働　菊野　一雄　三二〇〇円
民事訴訟法における既判力の研究
〈慶應義塾大学法学研究会叢書54〉　坂原　正夫　八二四〇円
中学校国語指導資料　国語科における学習指導と評価
―作文の学習指導―　文部省　二五〇円
中学校特別活動指導資料　指導の改善と評価の工夫　文部省　三一〇円
中学校社会指導資料　作業的、体験的な学習の充実―社会科における学習指導の工夫と評価―　文部省　七一〇円
遊びの指導の手引　文部省　一〇〇〇円

■産能大学出版部
発想力の冒険　高沢　公信　一六〇〇円
あなたの色はなにいろ　森　喬　一八〇〇円
驚異の新規顧客開拓法　玉置　義魂　一六〇〇円
改訂新版　戦略行動型リーダーシップ　岡部　博　一八〇〇円
新しい人間管理と問題解決　E・H・シャイン／稲葉元吉訳　三八〇〇円
「自動車産業」激変の構図　安田有三・山下雄璽郎　一六〇〇円
正師に出会わざれば学ばざるに如かず　荒井　節子　一五〇〇円
財務・計数感覚を磨く本　山下　福夫　一六〇〇円
地域活性化戦略　小倉　光雄　二〇〇〇円
CIMのすべてがすぐわかる本　菅野　英治　二五〇〇円
マーフィーの黄金律（PART2）しまず　こういち　一五〇〇円

■玉川大学出版部
情報社会の子どもたち　小川　信夫　一八五四円
学問の道草―荘司雅子エッセイ集―　荘司　雅子　二〇〇〇円
能面型紙集　中西　通　七七二五〇円
アジアの大学―従属から自立へ―
アルトバック＆セルバラトナム編／馬越・大塚監訳　七二一〇円

■中央大学出版部
ドイツ現代家族法　田村五郎編訳　三二九六円
「日本的経営」の再検討　中央大学企業研究所編　三六〇五円

協同思想の形成―前期オウエンの研究―　土方　直史　三八一一円

■東海大学出版会

子どもと環境教育〈環境教育シリーズ①〉　阿部　治責任編集　二八八四円

学校と環境教育〈環境教育シリーズ②〉　大田　堯責任編集　二八八四円

社会と環境教育〈環境教育シリーズ③〉　岡島成行責任編集　二八八四円

地球と環境教育〈環境教育シリーズ④〉　藤原英司責任編集　二八八四円

科学と環境教育〈環境教育シリーズ⑤〉　松前達郎責任編集　二八八四円

地球マネジメント　北原貞輔・石井　薫　二五七五円

身体障害者のためのスクーバ・ダイビングマニュアル　ジル・ロビンソン他／近藤他訳　二〇六〇円

キャプテン孫七航海記　本田　節子　一六四八円

ビザンツ世界東方の旅　尚樹啓太郎　二八八四円

古生物学者の回想―マンモス象を追って六十年―　ヴェレシ・チャーギン／新堀・金光訳　一八五四円

エッダ誌　巫女の予言　シグルズル・ノルダル／菅原邦城訳　四九四四円

デンマーク人の事績　サクソグラマティカス／谷口幸男訳　六六九五円

Recent Advances in Cephalopod Fisheries Biology　奥谷喬司他編　二五七五〇円

Japan and the World : a Miscellany of Thoughts　松前達郎／モリス・ジェンキンズ英訳　五一五〇円

■東京大学出版会

中国20世紀史　姫田光義他　二八八四円

アテナイ公職者弾劾制度の研究　橋場　弦　八八五八円

東アジアと日本〈比較政治Ⅲ〉　升味準之輔　五九七四円

オスマン帝国の権力とエリート　鈴木　董　四一二〇円

太平洋戦争　細谷千博他編　八二四〇円

多チャンネル化と視聴行動　東京大学社会情報研究所編　九二七〇円

近代に生きる〈オセアニア3〉　石川榮吉監修　三〇九〇円

Japan's Public Sector　柴田徳衛編　四三二六円

枢密院会議議事録58・昭和篇16　国立公文書館所蔵　一四四二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇40　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇43　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇44　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円

農業経済学　生源寺真一他　三〇九〇円

民営化の政治過程　飯尾　潤　四六三五円

アジアの証券市場　大阪市立大学経済研究所　濱田博男編　四九四四円

薄闇のローマ世界　本村　凌二　四六三五円

第四紀試料分析法　日本第四紀学会編　九七八五円

生体膜の動的構造〔第2版〕〈UPバイオロジー38〉　大西　俊一　一六四八円

進化古生物学入門〈UPバイオロジー93〉　池谷仙之・山口寿之　一六四八円

SASによるデータ解析入門〔第2版〕　大橋靖雄他　三二九六円

〈SASで学ぶ統計的データ解析1〉

東京大学年報　第3巻　東京大学史史料研究会編　二二六六〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇41　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇45　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇46　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録59・昭和篇17　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
図集　日本都市史　高橋康夫他編　二五七五〇円
言語学　風間喜代三他　二五七五円
交錯するアジア〈アジアから考える1〉　溝口・浜下・平石・宮嶋編　三〇九〇円
BASIC英米法辞典　田中英夫編集代表　二八八四円
都市財政の研究　持田　信樹　四九四四円
規制と競争の経済学　清野　一治　四九四四円
赤血球の生化学〔第2版〕〈UPバイオロジー22〉　水上　茂樹　一六四八円
Cによる統計物理　木原　太郎　二八八四円
都市と建築　S・E・ラスムッセン／横山正訳　四六三五円
The Contemporary Japanese Economy　館　龍一郎　四一二〇円
Japanese Constitutional Law　P・R・ルニー・Jr・高橋和之編　七六二二円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇42　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇47　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇48　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録60・昭和篇18　国立公文書館所蔵　一四四二〇円

■東京電機大学出版局
現代数学発展史—現代数学の進展—方法・概念・思想の変遷　A・F・モンナ／鶴見和之・新井理生訳　三〇九〇円
第2種情報処理試験全問題解答集〔'93年秋季版〕　桂重俊・井上真　三五〇二円
量子力学演習〈理工学講座〉　桂重俊・井上真　三六〇五円
統計力学演習〈理工学講座〉

■東京農業大学出版会

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局
外部の消失—亡命のマニフェスト—　A・コドレスク／利沢行夫訳　二九八七円
偉大な世紀のモラル—フランス古典主義文学における英雄的世界像とその解体—　P・ベニシュー／朝倉剛・羽賀賢二訳　四四二九円
シュミットとシュトラウス—政治神学と政治哲学との対話—　H・マイアー／栗原隆・滝口清栄訳　二〇六〇円
習字の科学　大澤　一爽　一八五四円
作物のなかの歴史　塩谷　格　一九五七円
日本捕鯨史話—鯨組マニュファクチュアの史的考察を中心に—　福本　和夫　二二六六円
医とからだの文化誌　中川　米造　二四七二円
海女（あま）—ものと人間の文化史73—　田辺　悟　二八八四円
サテュリコン—自身が語るデュルの世界—　H・P・デュル／原　研二訳　二六七八円
乞食オペラ　J・ゲイ／悔保眞夫訳　二二六六円
狂気の社会史—狂人たちの物語—

R・ポーター／目羅公和訳　四四二九円
危険を冒して書く―異色作家たちへのパリ・インタヴュー―
J・ワイス／浅野敏夫訳　二九八七円
名誉と快楽―エルヴェシウスの功利主義―
森村　敏己　五一五〇円
数奇なる奴隷の半生―フレデリック・ダグラス自伝―
F・ダグラス／岡田誠一訳　一九五七円
悪口を習う―近代初期の文化論集―
S・グリーンブラット／磯山甚一訳　三六〇五円
感情の自然　山形　頼洋　四九四四円

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・ソフト）
日本文化論　尾藤　正英　一八五〇円
現代物理学　小沼通二編著　二二七〇円
〔教師教育ビデオ教材＝いずれも放送教育開発センター編
印刷教材10冊を含み定価各一九〇〇〇円〕
○生活科――授業の準備と心がまえ――（34分）
○生活科――授業をふりかえる――（34分）
○生活科――地域協力のある授業例と年間計画――（33分）

■明星大学出版部
国際開発政策―序論―　二神　重成　三二九六円

■早稲田大学出版部
テレビドラマ・映画の世界　鳥山　拡　二四〇〇円
立原正秋小説事典　武田勝彦・田中康子編著　六八〇〇円
ニーチェ解読　中原道郎・新田章編　四五〇〇円
アトラス　水害地形分類図　大矢　雅彦　六一八〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書
第42巻　南総里見八犬伝稿本(一)　柴田光彦編　一八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
科学と文化―人間探求の立場から―
井口　潔・藤澤令夫・村上陽一郎・飯島宗一　一八五四円
多国籍企業の租税戦略―日本企業のアジア進出を中心にして―
皆川　芳輝　三六〇五円
経済の原理―第3・第4・第5編―
J・ステュアート／小林　昇監訳／竹本　洋他訳　一五四五〇円
現代中国政治　毛里　和子　二五七五円
ヨーロッパ家族社会史―家父長制からパートナー関係へ―
M・ミッテラウアー&R・ジーダー／若尾祐司他訳　二四七二円

■京都大学学術出版会
スラッファ経済学の現代的評価〈福井県立大学研究叢書I〉
菱山　泉　三二〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
ぼくらは囚人だ　植松　健郎　七〇〇〇円
さまよえる人　ルース　ベネディクト
福井七子・上田誉志美訳　四〇〇〇円
現代日本論入門　眞鍋　俊二　二〇〇〇円
北米運河史研究　加勢田　博　四八〇〇円

■九州大学出版会
資本と時間―オーストリア派資本理論の研究―
石塚　杉男　五九七四円

貨幣数量説の新系譜―マルクス貨幣信用論の俗流化批判―　岡橋　保　三三九九円

ヒューマニティー―新たな深まりと広がりを求めて―　村山正治編　一五四五円

言語学からの眺望　福岡言語学研究会編　三五〇〇円

野菜の起源と分化　藤枝　國光　二八八四円

はぐくもう新しい視座〈九州産業大学公開講座4〉　九州産業大学公開講座委員会編　二〇〇〇円

間接税改革の国際比較　佐藤甫・山本盤男・内山敏典　二〇六〇円

サービス論争批判―マルクス派サービス理論の批判と克服―　刀田　和夫　三九一四円

スウィフトの詩　和田　敏英　三九一四円

▼涼しい――というより寒い。高校野球も始まったというのに、いったいこれは何なのだ。本号がお手元に届くころには、雪が降っているのではあるまいか。夏は暑く、冬は寒くというのが持論の私としては調子も狂う。お肌が荒れれば心も荒れる、調子が狂えば気分も乗らぬ、こんな短文でもなかなか書く気にならない。そこで今回は、人さまの「製作の現場から」を紹介してお茶をにごすことにしたい。

▼（財）日本出版クラブの会報『出版クラブだより』に、みすず書房の元編集者・小尾俊人氏による「本」が生まれるまで」が連載されている。この会報は少なくとも出版クラブ会員社にはもれなく配布されているはずだが、『大学出版』を含めて、この種の印刷物は人の目にふれにくい。まだお読みになっていない方も多いと思い、あえて紹介させていただく。

▼現在までの目次は次の通り。

1　表題なし（「現代史資料」企画の発端）……三二八号
2　1のつづき……三二九号
3　原稿の形成過程とその性質……三三〇号
4　「ゾルゲ事件資料」の機能変化……三三一号
5　「出版の自由」と「国」……三三二号
6　図書館……三三三号
7　本屋街……三三四号
8　印刷所（一）……三三五号
9　印刷所（二）……三三六号
10　校正（付・翻訳）三三七号

●製作の現場から　6
小尾俊人氏の製作の現場

11　企　画……三三八号
12　エージェント……三三九号
13　造本装幀（一）…三四一号

▼一見してわかるように、この目次の中で、狭い意味での「製作」にかかわるのは、8・9の印刷所と10の校正、13の造本装幀しかない。これをあえて小尾氏の「製作の現場から」の報告として読むのは無理があると思う方もあるだろう。だが、私はそう読んだ。もちろん全体としては「編集の現場から」の報告ではあるのだが、製作への力点の置き方が、編集と製作の不可分性の強調がこの連載の特徴をなしていると思うのだ。部分的な引用は誤解を招きかねないが、小尾氏は活字の書体に言及して次のように書いている。「…文字の奥にある論理の構造というよりも、文字のフェティシズムに安住したことが、その後の出版屋としての生活を決定したといえるかも知れない」と。

▼書体一つをとってもこれほどのこだわりがある。小尾氏にとっては「中身がよければ」とか、「読めればいいさ」などという発言は、おそらく絶対に許せないことだろう。「時代が時代だから仕方がない」という発言も同様だ。時代が時代だからこそ、こだわった本作りをしなければならない。読めるだけの本であれば、いずれ電子メディアに取って代わられるのは目に見えているのだから。

▼もう一つ、この連載を読んで印象付けられたのは取引先との関係のあり方についてである。具体的には精興社や理想社、半七美術製版印刷所、そして栗田印刷。いわゆる「下請け」とか「業者」といった言葉では収まり切らない「本作りの仲間」としての取引先との関係が、文章の端ばしから感じられるのだ。

▼「古き良き時代の話さ」としてかたづけるのは簡単だろう。「今はコンピュータが相手だから」とか、「コンピュータに職人気質は求むべくもない」とかいった声も聞こえてきそうな気がする。だが、本当にそうか。コンピュータにしても、操作しているのは人間であることが忘れられているのではないか。パートの入力オペレータはともかく、コーディング・オペレータともなれば、相当な職人気質がなければ出来ない仕事だと私は信じている。彼らに、そして、システムを設計しているプログラマに、製作の現場からの声を届ける努力をしなければ、コンピュータの都合による本作りがまかり通ることになってしまうだろう。（インターフェイス）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-726-2962
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第19号) '93秋　平成5年10月1日発行　発行所　大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内　東京大学出版会内　電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)〒共